

〈解答〉

- ① 1 ふるう
2 ウ
3 オ
4 [例] A 震え(2字) B [例] 裸のわが身にかかる雪を振りはらう(16字)
5 ウ

配点 ① 1、4 Aは各1点、他は各2点 10点満点

〈解説〉

「宇治拾遺物語」は、鎌倉時代に成立した世俗説話集である。今昔物語集、古今著聞集と並んで日本三大説話集の一つに数えられる。

1 「震」には「ふる(える)」という訓読み以外に「シン」という音読みもあり、「地震」「激震」などの熟語として用いられる。また、古文に出てくる語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に直す。よって、送り仮名の「ふ」のみを「う」に直し、「ふるう」とする。

2 2、3行目『雪のいみじく降る日(Ⅱ雪が激しく降ったある日)』、2行目『冬なれど帷をなん着たりける(Ⅱ冬でも帷子を着ていた)』侍が震えているのを「見て」いたのは「守」である。また、「守」の9行目『着たりける衣』と「北の方」の10行目『薄色の衣』を二つとも「取り」たのは「侍」である。

3 古語における「をかし」は、現代と異なり、客観的に見て「趣深い」意を表す単語である。また、文末の「かな」は、感動を表す助詞である。したがって、風情のある雪が降っていることにしみじみと感動している才「雪が見事に降っていることよ」が最も適当である。

4 和歌中の「ふるへ」という言葉には「(寒さに)震える」と「(雪を)振り払う」という二つの意味が込められている。

5 「北の方」は「守」が9行目『いみじく(Ⅱたいそう)褒め』たのと同じ理由で侍を10行目『あはれがりて』、着物を与えたのであるから、ウが正解となる。古語における「あはれ」は、哀れみではなく、主観的に「趣深い」意を表す単語であることを押さえる。

〔大意〕

今は昔、高忠という者が越前守だった時に、きわめて不幸な侍がおり、夜となく昼となく、勤勉に働いていたが、冬でも帷子を着ていた。雪が激しく降ったある日、この侍が、外を掃除しようとして、もののけがとり憑いたように震えているのを見て、守が、「歌を詠め。雪が見事に降っていることよ」と言うと、侍が、「何を題にして詠みましようか」と問う。「裸でいることを詠め」と言うと、ほどなく震える声を張り上げて詠み出した。

寒さに震えながら、裸のわが身にかかる雪を振りはらうけれども、なかなか（雪が）消えないのです。

と詠んだので、守はたいそうお褒めになり、着ていた着物を脱いで与えられた。北の方も感じ入って、薄色のたいそいい匂いの着物を与えた。侍は二つとも受け取ってさつと丸めて、脇に挟んで立ち去った。